

# 母親の態度と子どもの関係についての調査報告

岡 本 洋 三

(1981年10月15日 受理)

## A Report on the Relations of Mother's Attitudes to her Child

Hiromi OKAMOTO

### I. 課題と調査の概要

現代は子どもの発達にさまざまな問題をもたらしている。それは日々の新聞・テレビなどで報道されている学校内外での子どもの非行・犯罪といった「事件」としてあらわれているものばかりではない。一見、健全に成長しているようにみられている子どもたちにもさまざまな心身の異常が発見されている。この原因は簡単ではない。人間の発達に働いているさまざまな要因、たとえば家族関係を一つとってみても、その家族関係自体の現代における変化は巨大であり複雑であり、それが子どもの発達にどのような影響を与えているかは、積極的・肯定的な面もあれば消極的・否定的な面もあり、しかも周囲の社会的環境や子どもの性格にもよりプラスにもマイナスにもなりうるのであり、一義的にその影響を論ずることはできない。しかし大局的なおさえ方をすれば、今日の子どもの問題は、現代社会の特質・構造的な歪みが、おとな—とくに親の社会的意識・生活行動を通して子どもの生活に及んだ結果であるといつてよいだろう。子どもの問題はおとな、親のあり方の問題を抜きにして考えるわけにはいかない。

おとな、親の子どもへの影響をできるだけ具体的に明らかにして、今日の子どもの問題にたいする実践的な手がかりを見出したい、というのがこの研究の基本的な問題意識である。本稿では、これを「母親の子どもにたいする態度」が「子どもの発達」とどのように関連しているかという点に限定して、実証的に追求する。その資料は、私たちが行ってきた「鹿児島の子どもと親の生活と意識」調査で得られたものである。この調査結果の概要は既に『調査報告書(第一次)』<sup>1)</sup>として発表しているので、個々の詳しいデータはその報告書にゆずり、ここでは資料の性質を示す簡単な紹介をしておこう。

調査は、子どもの自立を基本的な生活習慣の確立状況や自主性・主体性でとらえ、その自立の形成と関係があると思われる母親のしつけや親子関係(母子に限定)の特徴をさぐることを課題として、1980年5月から6月にかけて行なわれた。それは、子どもとその母親に別々に60問の質問(その多くは3~5の回答選択肢をもつ)を「質問紙」で回答を求め、それを統計的に処理するという方法で行なわれた。調査内容は、父母の年齢・学歴・職業・家族構成・生活水準など13項目と、子どもへの質問、生活習慣18問、親子の接触・認知3問、自主性10問、母親のしつけについて9問、母子関係20問の計60問、母親への質問、母子の接触・認知7問、家庭の生活条件3問、

しつけ 30 問，母子関係 20 問の計 60 問である。調査票自体は無記名であるが番号により母と子がセットになっており，また質問内容もできるだけ同じにして母子の回答結果を比較できるようにした。調査対象は質問紙という方法上の制約と発達上の変化が著しい時期という点を考慮して，小学 5 年・中学 1 年・中学 3 年の 3 つの時点の子どもとその母親とし，地域的特性も考え「商業地区」「旧来からの住宅地区」「新興住宅地区」（以上鹿児島市内）と「近郊農村地区」（川辺町）の 4 地区を選定し，それぞれの地区の小学校・中学校から各学年の男女がそれぞれほぼ 100 名になるように学級を選び，学級単位で調査票を配布・回収した。有効標本数は 2351 組である。標本の地区・性・学年別の構成は第一表に示すとおりである。

第 1 表 地区別・性別・学年別構成

地 区	商業地区		旧住宅地		新興住宅		近郊農村		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
小 5	97	78	93	99	102	82	98	87	390	346
小 計	175		192		184		185		736	
中 1	104	116	107	89	98	96	104	101	413	402
小 計	220		196		194		205		815	
中 3	89	90	114	111	94	100	102	100	399	401
小 計	179		225		194		202		800	
地区合計	574		613		572		592		2,351	
%	24.4		26.1		24.3		25.2			
男・女計	290	284	314	299	294	278	304	288	1,202	1,149
%									51.1	48.9

学年% 小5 31.3 中1 34.7 中3 34.0

## II. 「問題の母親」の抽出

### 1. 母子関係の全体的傾向

今日の母親は子どもにたいして「支配的・干渉的・過保護的」な態度をとるものが多いといわれている。そしてそのような母子関係は子どもの自立に否定的な影響を及ぼすことも指摘されている。そこで，このような「問題の母親」をぬきだして，その子どもの生活，人格的発達がどうかを調べ，その影響を具体的に明らかにしようと考えた。この調査の母子関係の質問は，品川らの親子関係診断テスト<sup>2)</sup>の「拒否・支配・干渉・過保護・溺愛」の領域区分とその質問を参考にし，各領域の傾向をひきだすことを目的としてそれぞれの領域ごとに 4 問の質問で構成した。そして各領域毎に 3 問以上について明確な肯定の選択肢を選んだものを (A) — その傾向をもつもの，また 3 問以上に明確な否定の選択肢を選んだものを (C) — その傾向を否定できるもの，その他のものを (B) — 中間的傾向のもの，と評定した。その結果は第 2 表のとおりである。(％はすべて

第2表 親子関係の傾向(%)

		拒 否	支 配	干 渉	過 保 護	溺 愛
小学 5年	(A) 母子	6 19	17 47	6 8	14 7	1 4
	(B) 母子	66 24	81 32	82 75	44 59	39 57
	(C) 母子	28 57	2 21	12 17	42 34	60 39
中学 3年	(A) 母子	5 26	14 45	6 3	14 3	2 1
	(B) 母子	66 18	82 33	72 61	45 41	40 54
	(C) 母子	29 56	5 22	22 36	41 56	58 45

※ 小数点以下4捨5入したため合計が101となる。

小数点以下を四捨五入した。中学1年は、多くの場合小学5年と中学3年の数値の中間にあり、あるいはそのいずれかに近い数値を示しているので本稿ではすべて省略した。なお数値は、それぞれの集団——たとえば小学5年の子をもつ母親全体736名——の中で「拒否」領域のAが6%、Bが66%、Cが28%……という割合を示す%である。）

表から明らかのように、「問題的傾向」を肯定したA群の母親は多くない。「支配的」で17%、「過保護」で14%いるが、この数値は、「今日の母親は…」ということが出来るほど大きいものではない。しかし、子どもの回答をみると、「支配」と「拒否」の2領域において母親の回答を大きく超えたA群がみられ、また母親は「過保護」「溺愛」では小5で42%、60%がその傾向を否定しているのに子どもの方は34%、39%の否定でしかないというように、母親の回答とは異なった様相の母子関係を示している。この表から読みとれる事実をまとめながら、ここに示されている母子関係の特徴を描いてみよう。

母親は、(1)小5と中3ではあまり変化していない——母親の子どもにたいする態度は小5から中3の時期には変らない；(2)「拒否・支配・干渉」については(B)群が多く、母親は中間的であいまいな判断を示す傾向がある——自分の子どもにたいする態度をこの領域では肯定することも否定することも好まないのであろう；(3)「過保護・溺愛」については否定するものが多い；(4)以上と若干矛盾するようであるが「支配」「過保護」についてはそれを認めるものが他領域との比較では多い。

子どもは、(1)小5と中3ではちがいがあ、る、「干渉・過保護」を否定する(C)群が20%前後も増加する、——おそらく子ども自身の判断基準・感じ方が小5と中3では異なるのであろう；(2)「支配」を感ずるものが多い、「拒否」も中3で1/4をこえる。しかし反面「拒否」を否定す

るものも母親より30%弱も多い——「支配・拒否」には子どもは比較的是っきりした判断を示す；(3)「過保護」について母が小5、中3ともに14%認めるものがあるのに、子どもはほとんど認めない。小5では、これを否定するものも母親より少なく、あいまいな判断を示す。「溺愛」でもこれを否定する子は母の回答より少ない。——これらは「過保護・溺愛」について否定しきれない気持があることを示すものではなからうか。上記(1)とも関連させると、この子どもの気持は中3になると変化し、「干渉・過保護・溺愛」を否定する(C)群の増大にみられるように、これらの領域にたいする判断基準・感じ方を「甘く」しているようである。

以上のように母子関係の認識・判断において、母子の間にかなり大きくいちがいがあること、とりわけ「支配」において母子のくいちがいは著しく、また「過保護・溺愛」などの観念・感じ方もちがうことがわかる。このことは母親が「支配」でないと思っているのに、子どもは「支配」を感じ、母親が「過保護」ではないかと反省しているのに子どもはそれを当然の関係として期待しているといったちぐはぐさが、現代の母子関係の特徴として浮んでくることを示している。

## 2. 「問題」群と「対照」群の分別

さて、「問題的傾向」のある母子関係が子どもの自立にどのような影響を及ぼしているかをみるために、この「拒否」「支配」「干渉」「過保護」などの問題的傾向を濃密にもった母親とその子の集団とその傾向を示さない母親とその子の集団が比較できると好都合である。そこで母子関係の20問の質問の回答状況を調べたところ、(M46)の質問番号の質問にたいする回答がもっともよくこの「問題的傾向」を重疊的に示すことがわかった。この(M46)は「子どものしていることに『あれはいけない、これはいけない』と口を出すほうですか」という質問で、回答は(1)はい(2)どちらかといえばそう(3)いいえの選択である。——この同じ内容の質問が(C46)である。母子関係の質問はすべて、同じ内容を同じ番号でセットにしてある。——そこで(M46)の回答(1)の群をM-I群、(2)をM-II、(3)をM-III、とし、それと他の質問(母子とも)とをクロスさせて、各群の特徴をひき出してみよう。これらのクロス分析においては、このM-I~M-IIIの属性と組合せられた項目の属性(回答の選択肢に示される)との間で「独立性」の検定( $\chi^2$ 検定)を行なった。その結果、有意水準を0.01(1%)とし、それ以上の関係については表・図等に※(0.01~0.05)、△(0.05以上)の印をつけた。無印またはとくに断らないものはすべて有意水準0.01以下のものである。次の第1図は(M46)による分別によって、母親の各集団がどのような特徴をもつかを示したものである。(なお、M-IIは、M-IとM-IIIの中間の値をとるので、すべて省略した。グラフの中間の柱は全集団の平均%である。C-I、C-IIIは、それぞれM-I、M-IIIの子どもであり、その子どもの「母子関係」の回答の割合を示した。)

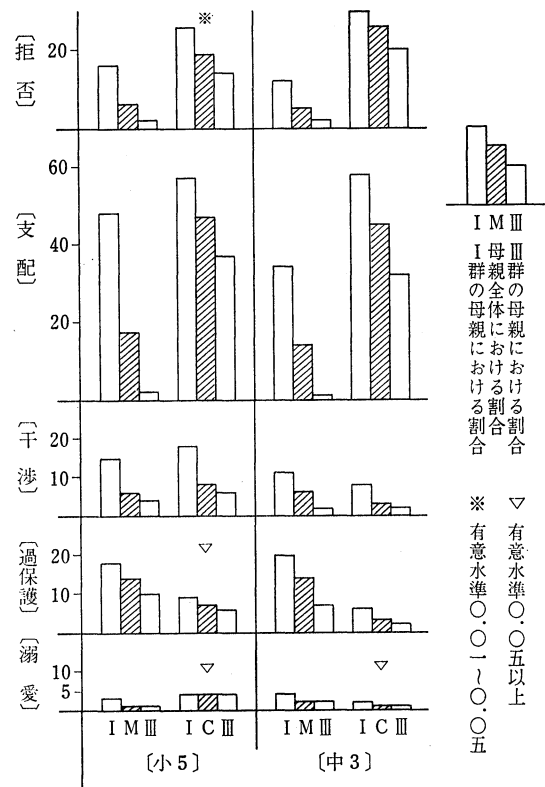
第1図は、左から小5のM-I、M(全体)、M-III、C-I、C(全体)、C-III、次に中3について同じ順で並べた。M(全体)C(全体)には斜線を施した。図から明らかなように、各領域ともに母親のM-Iは全体よりもきわだって高く、それぞれの「問題的傾向」の母親が多いことを示している。M-IIIでは反対に「問題的傾向」の母親はほとんど含まれていない。子どももほぼ同

じ傾向であるが、C-IとC(全体)との差は母親ほど大きくなく、またC-IIIはC(全体)よりは低い。「問題的傾向」を認めるものもかなり残っていることがわかる。中3では、母親の場合には各群ともに若干低下するが、子どもの方では「拒否」「支配」でI群が増加し、III群も「拒否」では増加するなど、母親とは異なった変化を示している。なお図には示さなかったが、中3でM-III、C-IIIは、それぞれの「傾向」を否定する者が顕著に多い。以上のように、(M-46)による集団の分別で、M-Iには「問題的傾向」の強い母親が、M-IIIにはほとんど「傾向」を示さない、むしろその「傾向」を否定する母親が属する集団がつけられた。そしてこの集団間の差は母親についてはすべて「有意」であり、子どもについては、小5「過保護」「溺愛」、中3「溺愛」を除けばこれもまた「有意」である。

3. M-I・M-III群の内部構造

先に「母子関係」の検討において、母子の間に大きくいちがいがあることを指摘した。また上記の(M 46)の回答による分別においても母親の方はわけて明確に分別できたが、その子どもでは母親ほどはっきりした傾向を示さないことを指摘した。以下においてM-I、M-IIIの母子関係や子どもの特徴を検出しようとするわけであるが、ここで、この母子の「ずれ」について若干具体的に数量的にみておこう。次の表は(M 46)と同じ質問(C 46)にたいする子どもの回答(C-1, C-2, C-3)とをクロスさせたものである。(無回答は除いた。)

表の左上の数字は標本実数、2段目右の数字はC群中の割合(%)下段の数字はM群中の%である。(M 46)(C 46)の質問は、母親の日頃の行動をたずねているものであり、比較的客観的に評価できる種類のものと思われるが、結果は上表の如く、母親の自己判断と子どもの母親認識はかなりの「ずれ」を示している。完全に母子が一致している(M-I, C-1)(M-II, C-2)(M-III, C-3)の割合は、小5で41%,中3で44%であり、中3で若干ふえるものの、半分以下である。回答選択肢の(2)は「どちらかといえばそうだ」という肯定に傾いた回答であるから、これを加えてみると(M-I, M-III; C-1, C-2)は、小5で40%,中3で39%であり、「ほぼ一致」を含めた%は、小5で62%,中3で63%である。以上のように母子の認識の一致度は、小5でも中3でもほとんど差はなく、完全一致は約4割、ほぼ一致も含めて約6割、対立する



第1図 (M-46)による分別集団の母子関係(%)

第3表 (M-46) × (C-46) (太数字は実数, 小数字は%)

(小5)	M-I	M-II	M-III	T	(中3)	M-I	M-II	M-III	T
C-1	50 21 47	119 49 39	72 30 23	241 100% 33	C-1	38 21 29	96 54 31	45 25 14	179 100 23
C-2	29 15 27	90 45 30	81 41 26	200 101 28	C-2	52 20 39	115 44 37	94 36 29	261 100 34
C-3	28 10 26	93 33 31	158 57 51	279 100 39	C-3	42 13 32	102 31 33	188 57 57	332 101 43
	107 15 100%	302 42 100	311 43 100	720 100 100		132 17 100	313 41 101	327 42 100	772 100 100
SIGN				Pr.<0.001	SIGN				Pr.<0.001

もの約4割とみてよい。ところで、対立する母子の約4割のうち(M-I, C-3)(M-III, C-1)のような完全対立組はどのくらいいるかをみると、小5で14%, 中3で11%である。先に完全一致の%ともあわせて考えると、わずかながら、中3の方が母子の相互認識が深まるように見えるが、この3%の差がどれほど意味があるかはわからない。

先に、母子関係の項でも指摘したが、母親の自己認識は小5と中3では大きな変化はなかったが、子どもにはかなり変化がみられた。この点はこの(M46)(C46)の回答でも同様である。子どもの回答は、中3では母親にたいする否定的な見方(C-1)が10%減少し、中間的あるいは肯定的な評価に転じている。

以上のように母子の認識のずれは、かなり複雑な構造になっている。ここでは以下の分析の関係からM-I群とM-III群のこの「ずれ」の特徴をみておこう。M-I群の子どもの中で母親と同じ認識をもっているC-1は小5の47%から中3では29%と18%も減少し、逆にC-3は26%から32%と6%増え、全体的に中3のM-I群の子どもは母親の「傾向」を反映する子どもはかなり少なくなっている。M-III群では、母親と対立するC-1の子どもが9%減少し、一致するC-3が6%増加し、この方はM-IIIの傾向をさらに反映する構造に変ってきている。このような変化は、M-I群とM-III群を比較していく場合に、中3ではその比較対照性が弱くなっていることを考慮する必要があることを示している。

### III. 「問題」群の母子関係

#### 1. 母子の日常的接触

母子の日常的な接触をみるために、(C6)「家を出るとき『いってまいります』, 帰ったとき『ただいま』などと家の人にあいさつをするか」<sup>9)</sup>, (C9)「外出するとき、家の人に行先や帰宅時間をいうか」の2つの質問で調べてみる。(C9)の問と同旨の質問を(M19)で母親にもしてい

るので、これをあわせて図示した。(C 9) と (M 19) は学年別にまとめた。図中の数字は % である。図から明らかなように、I 群・III 群の間に、(M 19) の小5を除いて「有意」差は認められない。「あいさつ」は小5ではほとんどの子どもがしている。中3で若干低下しているものの、I・III 両群ともとくに問題はない。

(C 9), (M 19) の「外出先、帰宅時間」をい

うことは、親が子どもの生活行動を知るうえで、また家庭において親に心配をかけないということや子ども自身が自分の行動に責任をもつ点からも大切なことであり、そこにまた母子の接触の度が具体的に示されるとされると思われる事柄である。これは両群ともに低く、小5で30%台、中3では25%が行なっているにすぎない。もっとも母親の回答では、I・III 両群とも子どもの回答より高い%であり、中3では19%も高い。恐らく実態は子どもの回答に近く、この20%ほどの母親は子どもが「いつもの」と思っているにすぎないのではなからうか。母子の接触(相互認知)という点から云うとこのひらきは問題がありそうである。それはともかく、I・III 群の比較という点では、この日常的な行動場面での「接触」については、若干III 群が良いようにみえる程度で、「有意」な差はないといってよいだろう。

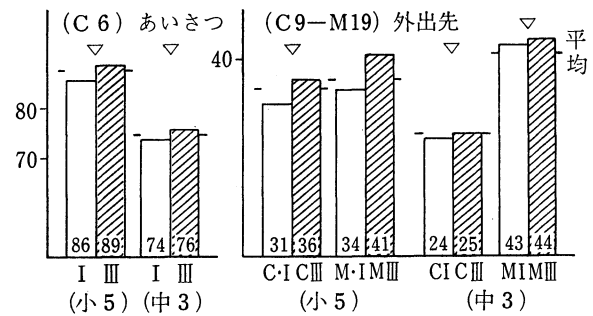
## 2. 相互認知

母親が子どもに好ましい影響を与えうるためには、母子の相互信頼の関係が成り立っていることが必要である。この相互信頼の関係は、相互の接触・認知・理解・共感などによって生みだされ、またこの関係のなかでそれらがより強められていくものであろう。前節で、その「接触」についてみたが、ここでは「認知」の面について調べる。

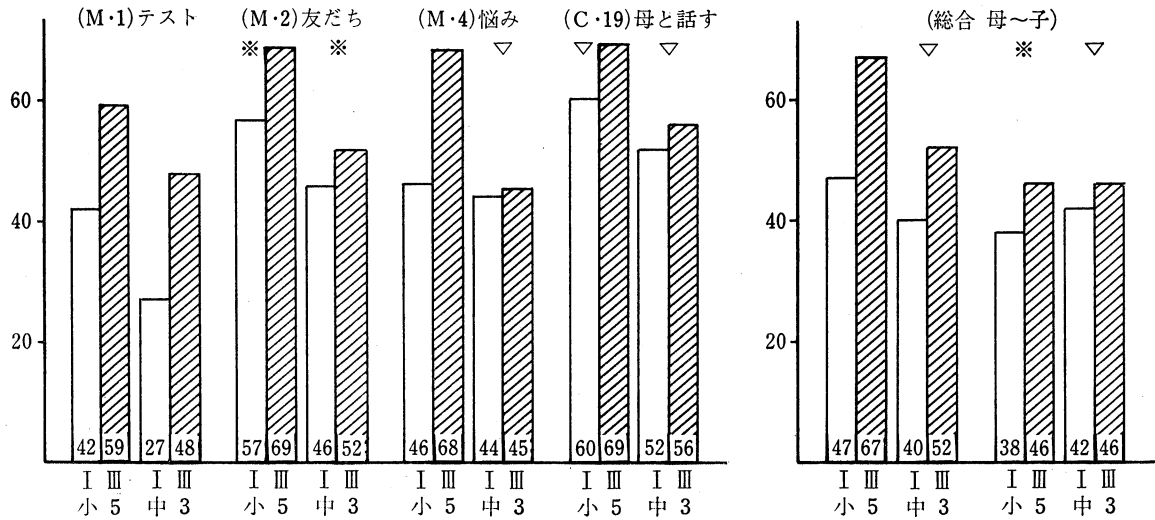
今日の母親がとりわけ強い関心をよせている子どもの学校生活の状況について、子どもは母親に話しているか、また母親はどのくらい子どもについて知っているか、を次の質問を手がかりに調べてみる。(M 1)「テストの成績などをいつも見せるか」(M 2)「子どもは友だちのことを話すか」(M 4)「子どもが学校で何のクラブに入っているか知っているか」(M 3)「子どもは悩みごとを相談するか」、この4問の回答で3問以上に「肯定」回答をしたものを(A)と評定する「総合評価」の5つから母親について調べ、(C 19)「お父さんお母さんなどとよく話をする方か」、それと父親のしごとについての認知などから子どもを評定した「総合評価」から子どもについて調べたのが第3図である。

「子どものクラブ」については、小5で97%、中3で89%の母が知っていると回答し差が認められないので省略した。

母親の側からみた子どもについての認知(それはまた子どもが母親とどれほど接触しているかも示すものである)は、小5ではどの項目でもIII 群が顕著によい。とくに「悩み」ではI—III 群の差



第2図 母子の接触



第3図 母子の相互認知

は22%もある。しかし「テスト」を除いては中3ではかなりその差がちぢまる。子どもの側からみると、「父母と話す」ことは中3で減るが、「総合」ではそれほど大きな変化ではない。個別の比較は省略してこの図から導かれる結論は、小5のI群の母にたいして子どもは60%が話す(C 19)と答えているが、母親の各項目の回答はいずれも40%台であり、子どもをつかみきれないでいる。III群は各項目とも子の回答%に近く、子の話から子どもの生活がかなりつかめている様子である。中3ではIII群の回答が大幅に低下し、結局I群との差が小さくなり、「総合」においては、I・III群ともに母子の認知状況が一致してくることである。

子どもが発達し自立していくということは、一面から云うと「親離れ」していくことであるからこの小5か中3にかけて母子の相互認知が低下することは当然であるとも云える。とすると、問題は小5の段階におけるI・III群の差がもつ意味・影響である。たとえば「テスト」について小5でI群では40%強の子どもしか母親に見せないというのは、母子の通常の「信頼」的關係を想定すればやはり問題であろうし、またこの子どもの態度が母親を不安にさせることにもつながっていくのではなかろうか。

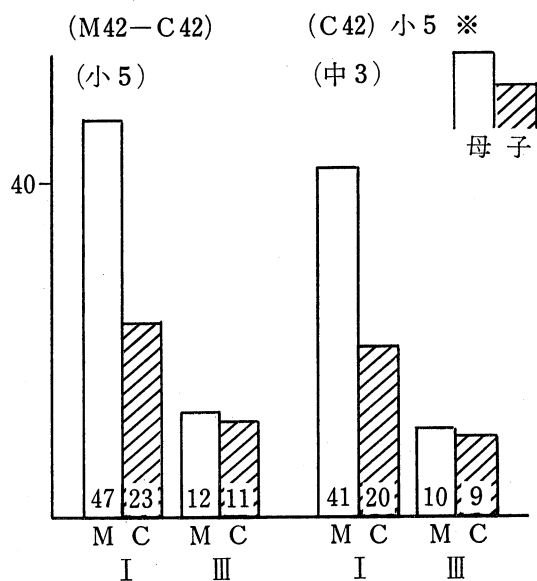
### 3. 母子の心理的關係

I・III群が心理的な面ではどちらがうのかをみるため、(M 42)「この子の欠点ばかりが目についたり気になるか」(C 42)「お母さんは、あなたの良いところはあまりみないで、悪いところばかりみがちだと思ふか」という「相互不信」を反映するものと、(M 49)「子どもの将来について計画をたて、その目標のためできるかぎりのことをしようと思ふか」(C 49)「お母さんは、あなたをりっぱな人にするためにどんなことでもしてくれると思ふか」という「愛情・期待・信頼」などを反映するものを取りあげる。

第4図は、(M 42)と(C 42)を組み合わせ、同じ群の母子を並べたものである。母子ともに、小5も中3もI—III群間に大差があること、I群の母子に「相互不信」の回答が多いことがわか



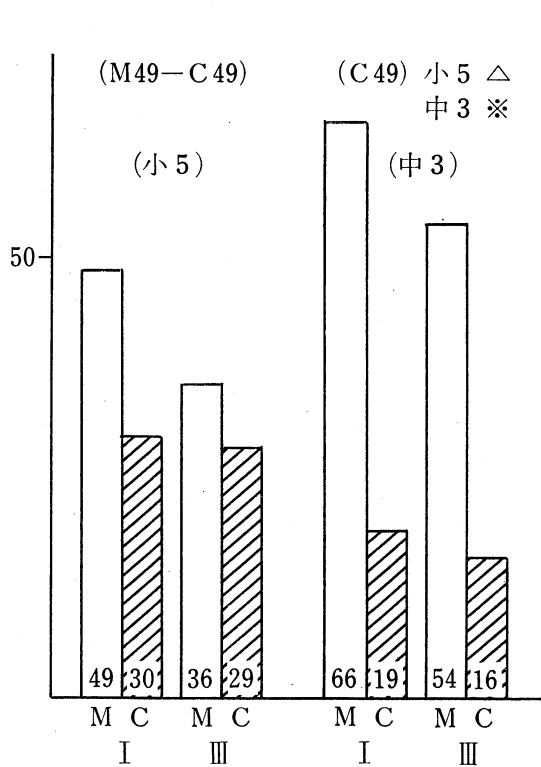
る。また同じ群の母子間では、Ⅲ群では小5、中3ともにほとんど差がなく、数値的には「相互不信」を回答した母と子の割合は等しい。ところがⅠ群では母と子は2:1である。つまり、Ⅰ群の母は小5で47%が子どもに「不信」感を抱いているが、子どもの方では23%が母親がそうだと思っているにすぎず、残りの24%は母親を信頼するグループに含まれているのである。中3でも同様の傾向で、子どもは母親を好意的に「信頼感」をもっているということであろう。



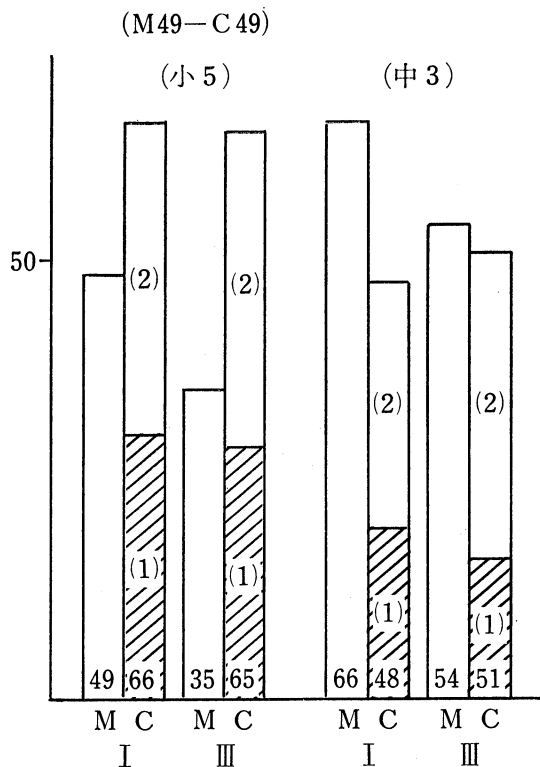
第4図 相互不信

第5図は (M 49) と (C 49) の結果を示す。この図で特徴的なことは、母親ではⅠ・Ⅲ

群間に差があること、そしてⅠ群の母親が「有意」に高いこと、しかも両群とも中3で大幅に増大していること、一方、子どもの方ではⅠ-Ⅲ群間にほとんど差がなく、また中3では子どもは両群ともに減少するというように、母子に対照的な傾向がみられる。つまり、子どもは群間のちがいがなく同じような感じ方で母親をみているし、母親にたいする「期待感」も中3では同じように減少する——冷めていく——のにたいして、母親の方はⅠ群は小5のときから「子どものために……」と



第5図 相互信頼



第6図 相互信頼

いう気持を強く抱き、それが中3になるといよいよ強まっていく——熱くなる——のである。そして「熱くなる」点ではⅢ群の母親も同様である。これは中3という時期が母親の気持を大きく変えるということであろう。中3という「高校進学」など子どもの将来について考えざるを得ない時期になって、これまでそれをあまり強く意識していなかった母親たちも「子どものために」ということを強く意識するようになるのであろう。一方、子どもの方は中3ともなれば現実の問題として「親に期待しうる限度」を認識し、「期待感」が低下していくのではなからうか。

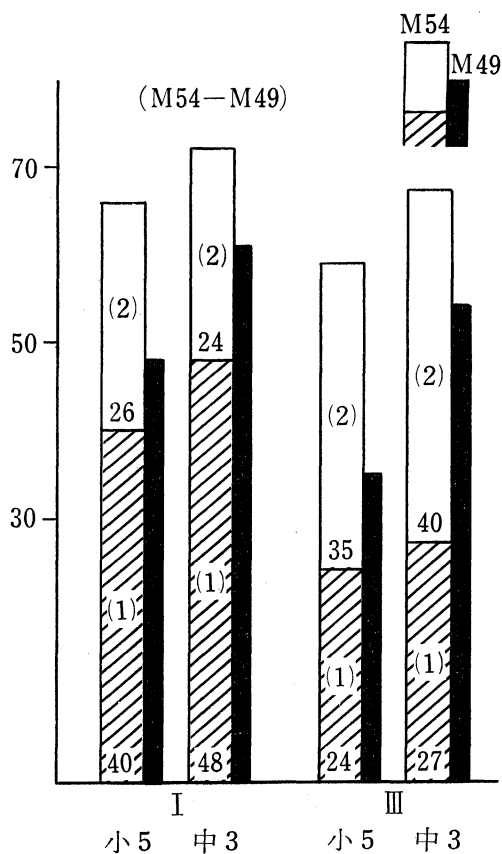
ところで、第5図では母子のギャップが非常に大きいのは、回答選択肢のつくり方にも影響されている。(M 49)の選択肢は、1. そう思っている 2. 多少は考える 3. いいえ の3段階であるが、(C 49)の方は、1. はい 2. たぶんそうだと思う 3. わからない であって1. と2. とが内容的に接近していて、実質的には2段階に近くなっているからである。そこで子の回答を1+2として図示してみたのが第6図である。小5では、子どもの母への「期待」が親を上回わり65%になり、中3でも両群ともに50%前後の子どもが「期待している」状況が示され、この方が子どもの心理状況をより適切にあらわしているようである。そしてⅢ群の母子はほぼ一致した状態を示している。

#### 4. 母親の「神経質さ」

母親が子どものことを思うのは自然の感情である。これまでいくつかみてきた回答状況のちがいは、I—Ⅲ群の母親にこの「子にたいする感情」のあらわれ方にちがいがあることを推測させる。

そこで、母親の「神経質さ」「心配性」を反映する(M 54)（子どもがちょっとけがをしたり病気になったりするとひどく心配になる方か）の回答を比較してみよう。これと先の(M 49)の回答とを組合わせて図示したのが第7図である。この図では小5と中3の変化をみるため、I群の小5—中3、Ⅲ群の小5—中3と並べてある。それぞれの横に細い柱で(M 49)を示した。(M 54)の回答の下の部分、1 は上の部分は、2 どちらかといえば である。

回答1は、かなり神経質な過保護的傾向をもち、回答2は、ややその傾向があるのではないかと自己判断している部分である。現代のように情報過剰で母親にいろいろと心配の種をつくりだしている状況では、回答2まで含めるとI群では7割前後の母親がこの中に入ってしまう。Ⅲ群も中3ではそれに近づいている。I群の特徴はこの神経質な母親が小5で4割もい



第7図 神経質な母親

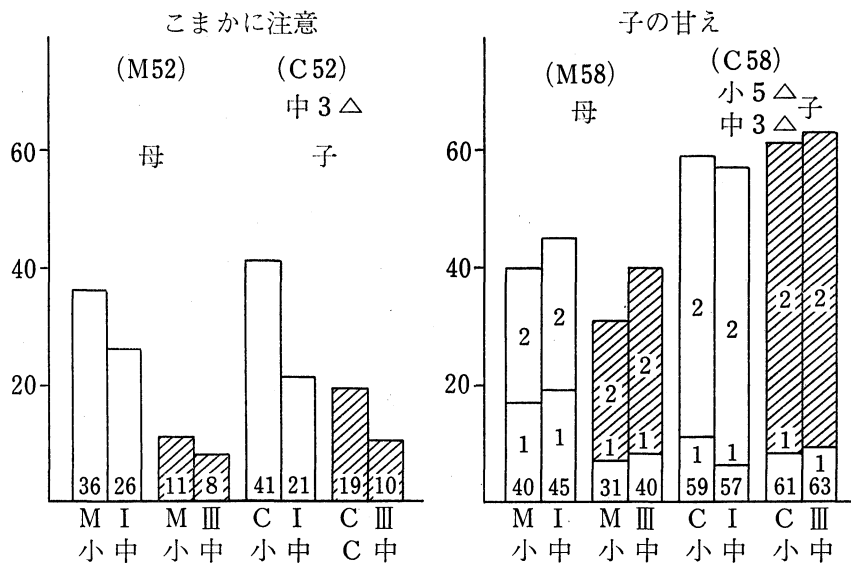
ることである。Ⅲ群は、回答1は少なく、回答2（いわば回答1の予備軍？である）がかなり多い。小5から中3になるとそれぞれ若干増加する。回答2の方がいくらか多く増えている。中3では不安材料が多いのであろう。

さて、この(M54)の回答と(M49)とをくらべると、Ⅰ-Ⅲ両群とも、「子どものけがや病気に神経質になるよりも「子どもの将来のこと」に気をつかうほうが多いこと、それが中3で激増して回答2の親たちの大半が「子どもの将来のために何かしてやらなくては」と強く思うようになるといえそうである。

5. 「管理」主義と「甘やかし」の共存

「問題の母親」の特徴は、子どもへの愛情が理性的な判断をとまなわず感情的に表現されているところにあるように思われる。「子どものために」という気持で子どもの生活に「口出し」しているようである。そこで母親の「管理」主義的傾向が示される(M52)「子どもの小遣いの使いかたを細かく聞いたり注意したりするか」と、子どもを「甘やかす」傾向が反映するであろう(M58)「子どもにしごくねだられると、最後にはまけて子どものいうとおりにしてやるほうか」という2つの質問について調べてみよう。これらの質問と同旨のものが(C52)(C58)で子どもに行なわれているのでそれも並記した。(M58)(C58)は回答2（どちらかといえば）も記した。

Ⅰ群では「管理」主義的母親が36%，子どもの回答では41%で、かなり多い。Ⅲ群は小5で11%である。もっとも子どもの方はⅢ群でも小5では母親の回答の約倍、19%いる。「甘やかし」の方は、はっきり肯定しているものはさすがに少ないが、それでもⅠ群の母親は17~19%いる。回答2も含めると40~45%の母親が「甘い」部類に入る。もっともⅢ群でも回答2まで含めるとⅠ群にかなり近づくので、全般的に「甘い母親」が4割いるということになる。この点は子どもの回答からも裏付けられる。子どもではⅠ・Ⅲ群間や小・中学間の差は小さく、回答2まで含める



第8図 「管理」と「甘やかし」

と6割の子どもが母親を「甘い」とみている。

結論として、I群の母親は、かなり「管理」主義で子どもの生活に細かく介入するが、他面子どもの云いなりになる傾向も多分にもっているといえる。しかし子どもの方はこの母親の群のちがいをあまり反映せず、また学年でもあまり変化せず、全体的に母親を「甘い存在」として感じているようである。

#### IV. 「問題の母親」のしつけ

母親のしつけは、I、III群の間でどのようなちがいがあるだろうか。またこの「しつけ」をそれぞれの群の子どもはどう「うけとめ」ているだろうか。母親の「しつけの努力」と子どもの「うけとめ」について調べてみよう。ここで「うけとめ」というのは、子どもにたいして「お母さんは、……のしつけをしているか」という質問をしたときの回答で、「1 よくいう 2 ときどきいう 3 ほとんどいわない」の3段階で選択させたものである。この回答は子どもがそのしつけを実行しているかどうかではなく、従って子どものしつけの「達成」状況を反映するものではない。しかし「母親のしつけの努力」が子どもに「うけとめられている」か、聞き流され気にとめていない状態かはわかるだろう。また子どもがその「しつけ」にたいして「意識している」かどうかも反映すると考えられる。

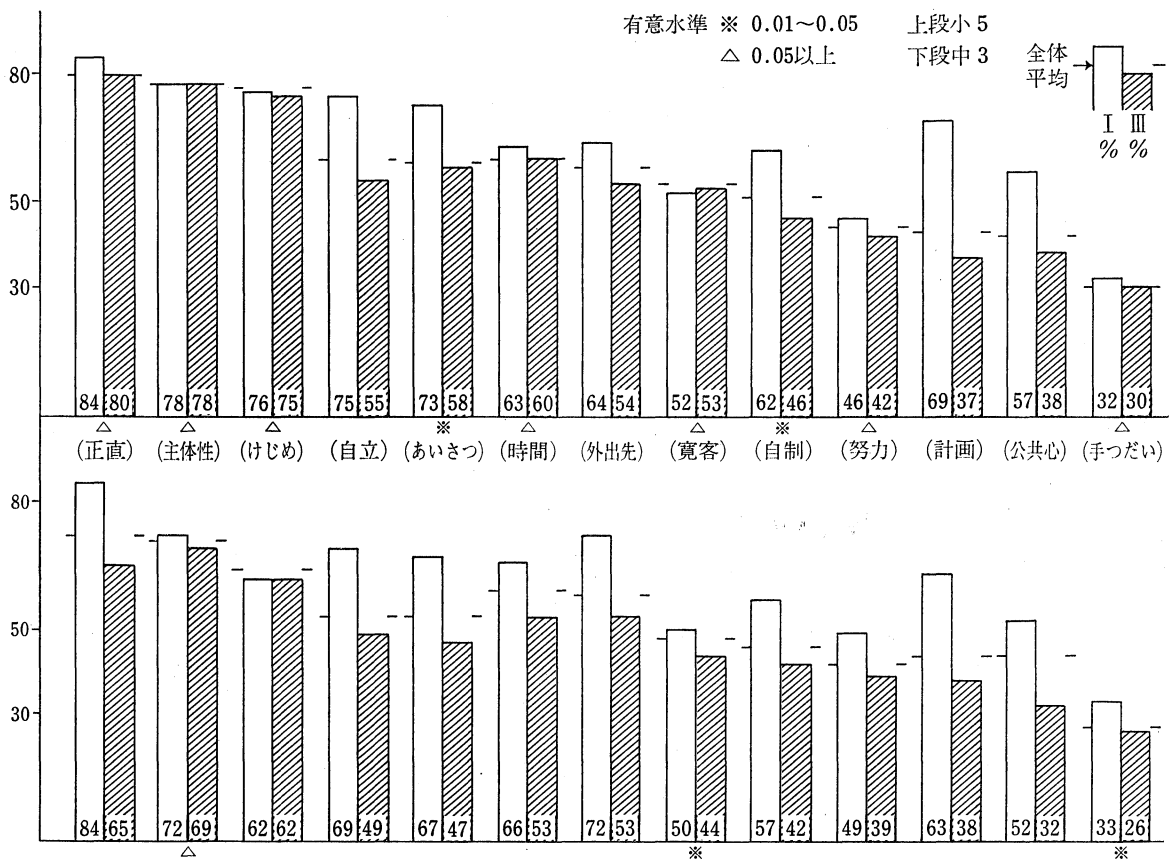
ここでとりあげた「しつけ」は次の通りで（C番号）はそのしつけについて子どもの「うけとめ」を調べてあるものである。最後の（ ）には、そのしつけの内容の略記を示し、以下の文中では略記を使うことにする。

- (M 27) 「家事を手つだうように」(手つだい)
- (M 28) 「他人のいうことにすなおに耳を傾けるように」(寛容)
- (M 29) 「人の好意に『ありがとう』自分が悪かったときには『ごめんなさい』というように」  
(善悪のけじめ)
- (M 30) 「自分の考えや意見をはっきり云うように」(主体性)
- (M 31) 「乗物のなかで騒いだり他人の迷惑になることをしないように」(自制)
- (M 32) 「あいさつ（おはよう；ただいま…）をするように」(C 32) (あいさつ)
- (M 34) 「外出するときに先や帰宅時間をいうように」(C 34) (外出先)
- (M 35) 「自分の部屋や机は自分で掃除・整理するように」(C 35) (自立)
- (M 36) 「うそをついたり、約束を破らないように」(C 36) (正直)
- (M 37) 「道路や公園などを汚さないように」(C 37) (公共心)
- (M 38) 「やりかけたことは最後までやりとげるように」(C 38) (努力)
- (M 39) 「勉強や遊びの時間にけじめをつけるように」(C 39) (時間のけじめ)
- (M 40) 「むだづかいしないように」(C 40) (計画性・節約)

### 1 「しつけ努力」の力点

母親のしつけ努力はしつけ項目によってちがいがあることがわかっている。この調査の結果ではおおよそ3つのグループにわかれていた<sup>4)</sup>。第1のグループは「正直・誠実」「主体性」「善悪のけじめ」で、これは大多数の母親がしつけをしている。第2のグループは「時間のけじめ」「自立」「あいさつ」「外出先・家庭生活のルール」「寛容」「自制」で、これは半数以上の母親がしているものである。第3のグループは「努力・意志」「計画性・節約」「公共心」「手つだい・家庭での役割分担」で、このしつけをしているのは半数以下の母親である。この「しつけ努力」の順位は、小5の回答の順である。第9図は、この順序で、I—III群を組みあわせて並べたものである。上段は小5、下段は中3である。

第1のグループの3つのしつけでは、I—III群間にほとんど差はなく、努力も高い。第2のグループでは、かなりI—III群間に差があり、I群の方が努力が高い。このちがいは全体の平均とくらべるとわかるように、III群が平均より若干下廻っていることもあるが、それよりもI群が平均を大きく上廻る努力をしていることによるものである。つまりI群の母親は「しつけ」を熱心にしておりとりわけ「自立」「あいさつ」「自制」などを重視している。しつけの順序においても、「外出先」「自制」などは全体の順序よりも上位になっている。第3のグループでも「努力」「手つだい」では群間の差は小さいが、「計画」「公共心」ではI群の母親がきわめて高い%になっている。この傾

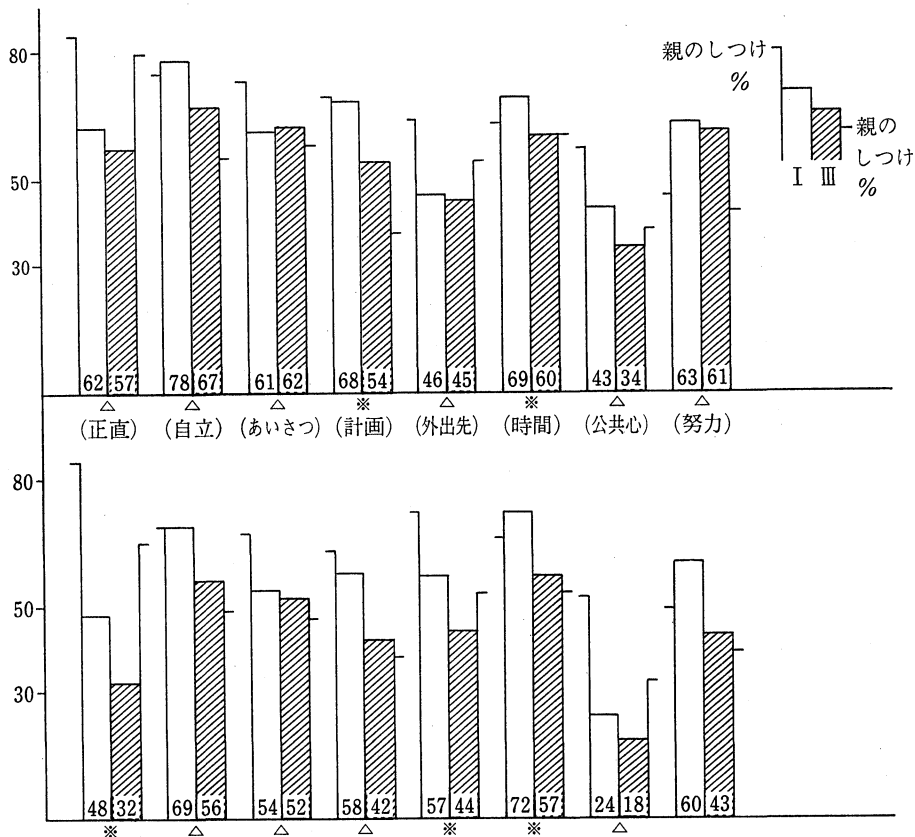


第9図 しつけの努力

向は、中3でも基本的に同じである。中3では全体として母親のしつけ努力は低下する傾向があるが、そこではI群は平均以上に努力し、III群は平均より努力する母親が少なくなり、そのため小5では差がみられなかった「正直」「時間」「寛容」「努力」「手つだい」にも「有意」な、あるいはそれに近い「差」があらわれている。I群の母親は「しつけ」に熱心であり、とくに小5では「計画性（むだづかいをしないように）」「自立（自分の部屋は自分で掃除をするように）」「あいさつ」のしつけに力を入れるとともに「公共心（公園などを汚さない）」「自制（他人の迷惑になるようなことはしない）」などの社会的なしつけにも努力している。中3でもほぼ同様であるがさらに「正直」や「外出先」のしつけも力を入れている。III群の母親のしつけにはこれといった特徴はない。小5では大体平均か平均を数%下る程度で、平均より努力しているしつけはない。中3では平均より下るものがふえ、「公共心」などでは12%も低く、しつけにあまり気をつかっていない母親が多いようである。なお「けじめ」「時間」「寛容」「手つだい」などは小5では差がない。

2 子どもの「しつけのうけとめ」

子どものしつけのうけとめを、第9図での小5 I群の母親のしつけ努力の高いものから順に並べたのが第10図である。従ってもし努力とうけとめが正比例的関係にあるならば、この第10図では左側から「うけとめ」の高いものが並ぶはずである。しかし実際には見られるように、しつけの「うけとめ」の並び方は不整である。小5のI群の子とIII群の子では、その数値(%)でみれば、



第10図 しつけのうけとめ

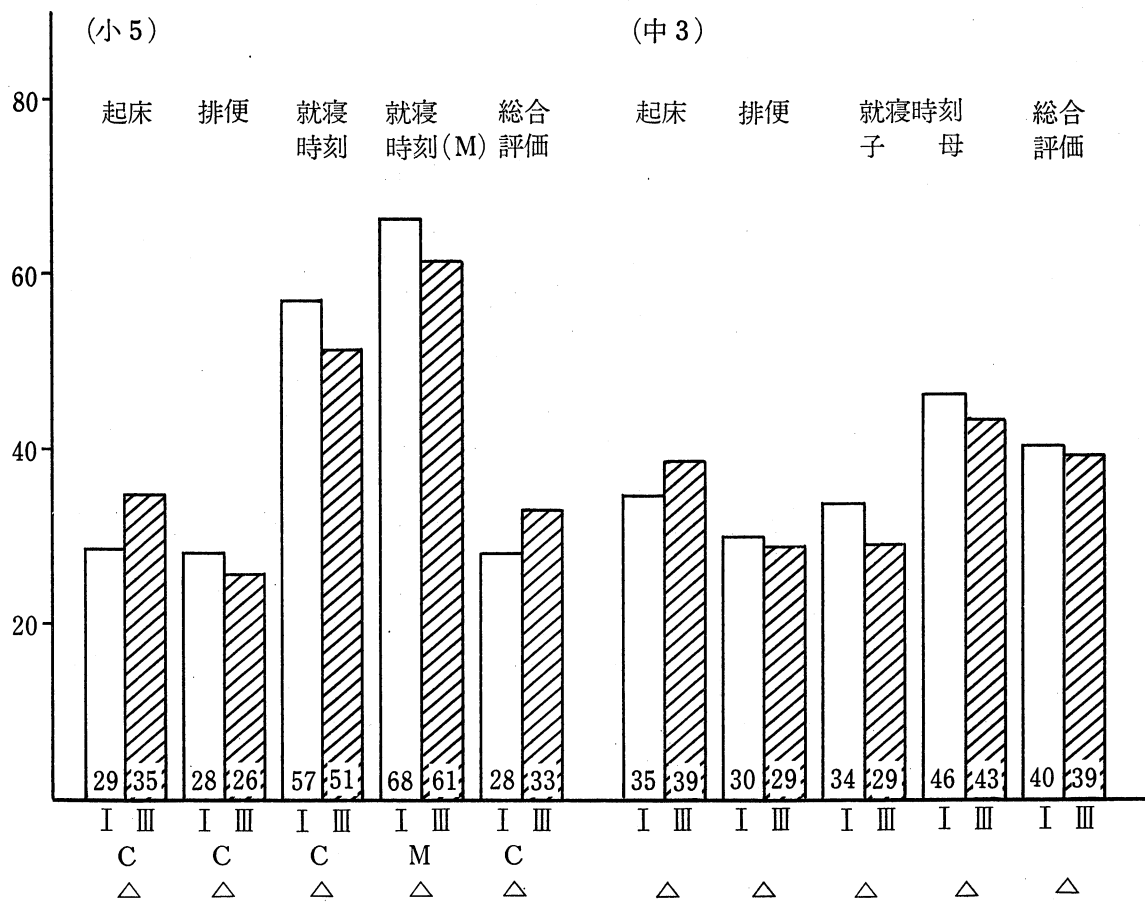
ほとんどのしつけでI群が高い。ただしそれは統計的に「有意」といえないものが多い。このI—Ⅲ群の差は中3でも同様の傾向を示している。多くのしつけ項目で、I・Ⅲ両群ともにそのうけとめは母親のしつけ努力よりも低い。とくに母親が努力している「正直」「あいさつ」「外出先」「公共心」などはかなり大きな差になっている。また一方では「自立」「時間」「努力」のように母親を上廻った「うけとめ」もみられる。これらは、しつけの項目（内容）によるものようで、I・Ⅲ両群とも同様の傾向を示している。結局、I—Ⅲ群の分別との関係で云えば、I群の方が「うけとめ」の人数（割合）は大きい、その差は「有意」でないということにとどまるようである。

### V. 「問題」群の子どもの生活

これまでI・Ⅲ群の母親のしつけ、子どものしつけのうけとめなどについて調べてきた。その結果は一言でいえば、I群の方が母親はしつけに熱心であり、Ⅲ群との間には「有意」な差がみられるが、子どもの方では「うけとめ」はたしかにⅢ群より高い傾向があるように見えるが、それは1%の有意水準ではその差を有意とみることはできないものが多いということであった。では、I・Ⅲ群の子どもの生活の実態はどうか、これを次に検討していこう。

#### 1 基礎的生活習慣

まず「起床」（ひとりで起きるか）「排便」（毎朝、家を出るまえに排便するか）「就寝時刻」（こ



第11図 基礎的生活習慣

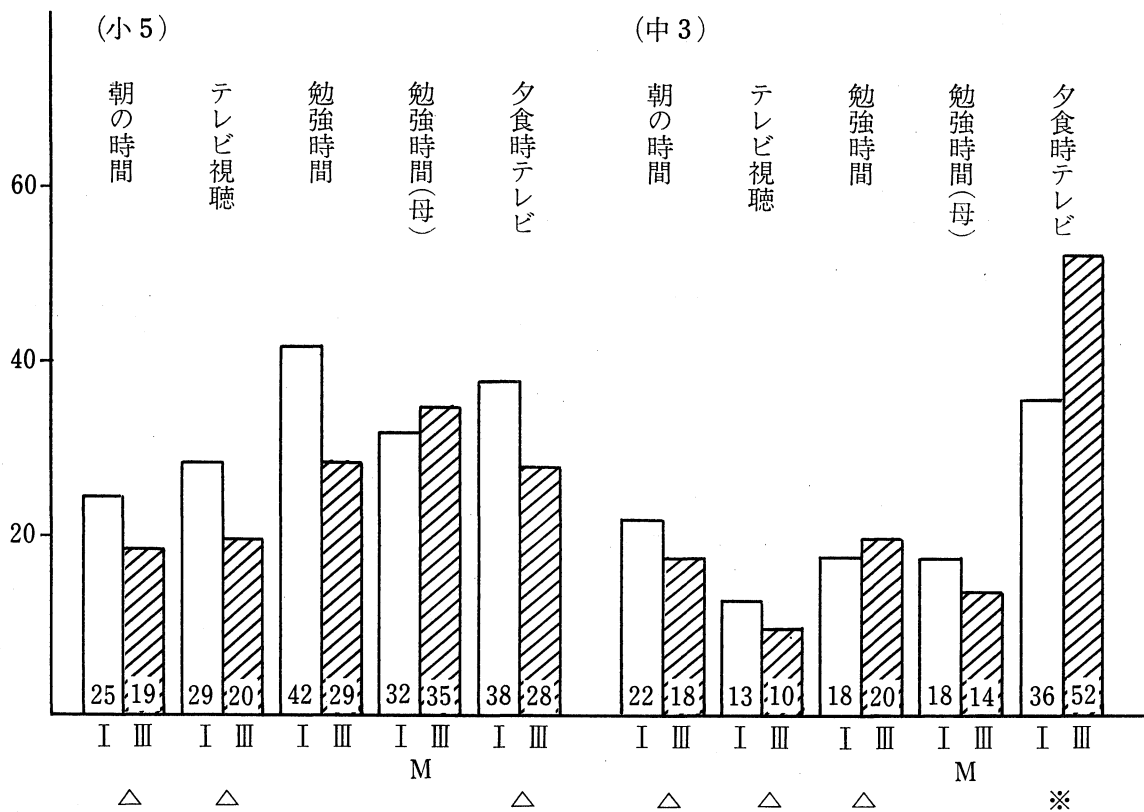
の調査での平均的な就寝時刻——小5は10時以前就寝が55%，中3は11時以前就寝が30%であるので、それをあてる——以前のもの)で、子どもの基礎的な生活習慣の状況をおさえることにする。また前の2項目に「洗顔・歯みがき」「朝食」を含め、このうち3項目以上で良好なものを(A)とする総合評価をつかったので、それも参考にす。就寝時刻については母親にもたずねているので、それも掲げておく。第11図は以上の項目についての回答(%)を示したものである。

基礎的な生活習慣は「総合評価」で小5はわずかにⅢ群がよく、中3ではⅠ群がよい。「起床」はⅢ群がよく、「排便」はⅠ群がよい、というように結果は項目によってまちまちであり、またその差はいずれも「有意」なものではない。すなわちⅠ—Ⅲ群の間には「差」はないとみてよい。そしてこの項目にみる限り、両群ともに一応良い習慣が確立しているとみられるのは小5で40%，中3で40%ほどである。

## 2 日常生活における規則正しさ

子どもたちの生活を「時間」的な面からみてみよう。「朝の時間」(朝起きてから登校までの時間20分以内のもの)「テレビ視聴時間」(3時間以上)「勉強時間」(1時間以下)「夕食時テレビをみる」(いつもみる)の4項目である。いずれも「好ましくない」ものの%を表示するようにした。「勉強時間」については母親にもたずねているのでそれも並記して第12図をつくってある。

小5では、勉強時間についての母の回答以外は、すべての項目でⅠ群の子どもがよくない。25%の子どもが、朝起きてから20分以内に登校するというあわただしい生活をしている。約30%の子



第12図 生活時間



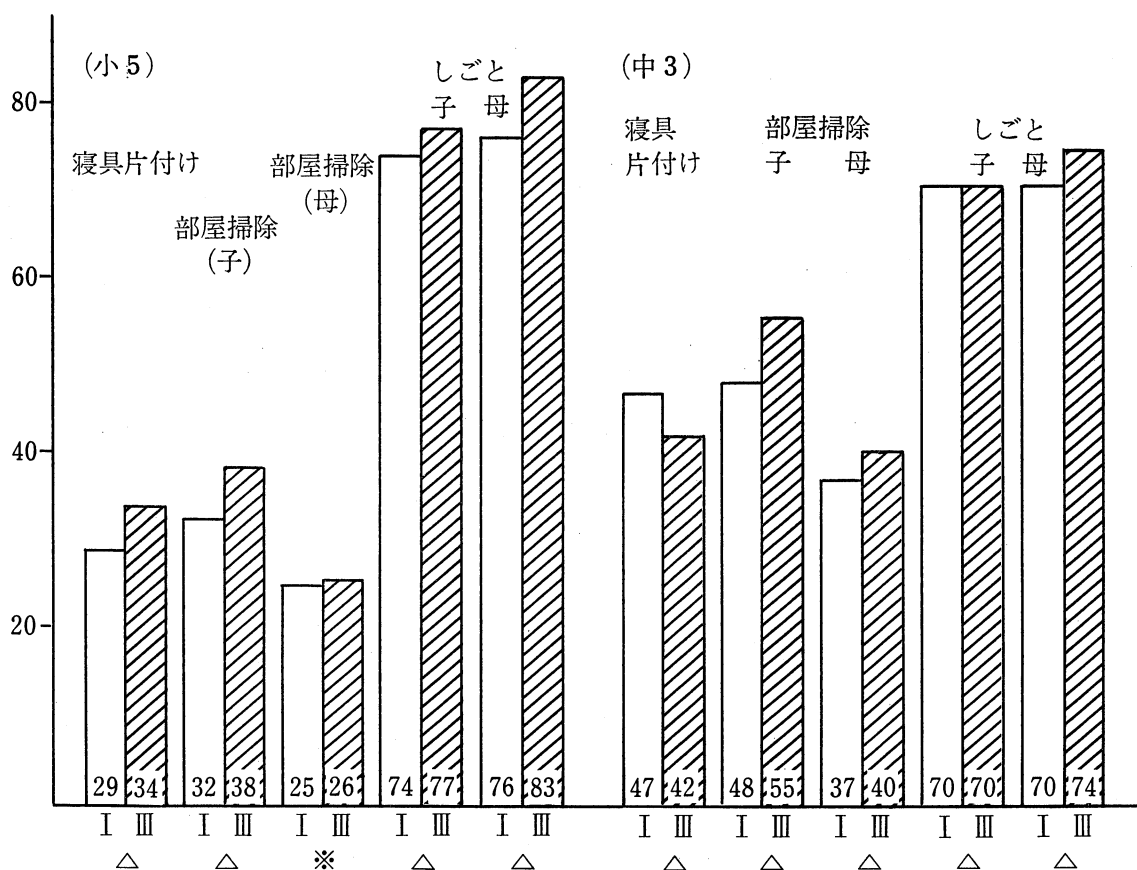
どもはテレビを日に3時間以上も見ており、40%以上の子が1時間以下の勉強時間である。そして40%弱の子どもが夕食の時にはいつもテレビを見るという生活のしかたをしているわけである。Ⅲ群の子どもはその各項目で10%前後「好ましくない」ものが少なくなっている。しかしこの差は、勉強時間を除いては「有意」といえない。

生活時間の面からみると、小5から中3へは「好ましい」変化を示している。「朝の時間」はあまり変わらないが、「テレビ視聴時間」も「勉強時間」も大幅に良くなっている。とくにⅠ群の子どもに変化が著しい。しかし「夕食時にテレビをみる」ことだけは、Ⅰ群で2%減少しているがⅢ群では逆に24%も増加している。これも現代の子どもの生活の特徴を示すものであろう。

### 3 自立的な生活習慣

子どもの生活を自立的なものに導いていくには、日常生活において自分のことは自分でするという習慣や家庭の中で自分の役割をもつことが必要であろう。そこで「寝具・ねまきなどを自分でかたつける」「自分の部屋は自分で掃除する」「家のしごとなどを手伝う」の3項目を第13図に示す。「部屋の掃除」と「しごと」の項は子どもと母親の回答を示してある。

自立的な生活習慣の確立は小5では3~4割の子どもに認められ、Ⅲ群の方が良好である。手つだいは両群とも高く、母親の回答でも高い(母親の回答は1 すすんでする と2 たのめばする



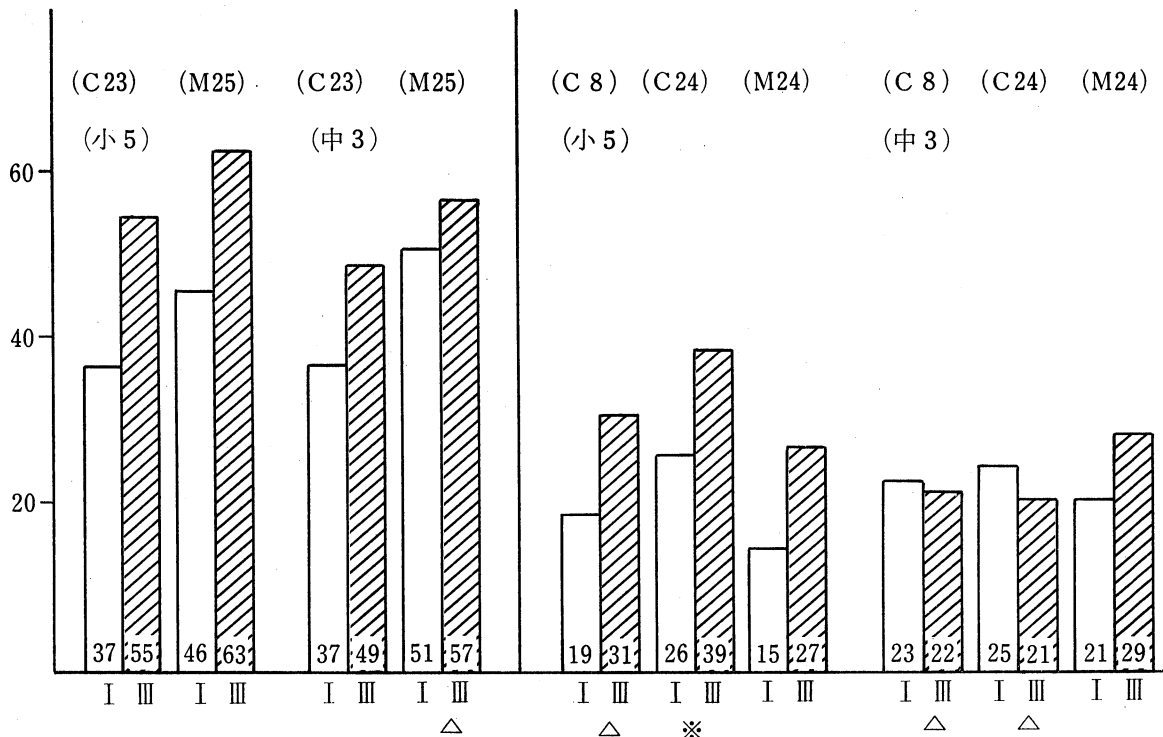
第13図 自立的な生活習慣

の合計である)。中3では好ましい習慣の確立は高まり5～6割になる。中3では「寝具の片付け」ではI群の方が良くなっている。全体としてⅢ群の方が良好に見えるが「有意」な差ではない。

#### 4 子どもの自主性

最後に子どもの自主性との関係を調べよう。自主性をどうとらえるかは難しい問題であるが、ここでは、自律性、主体性（自己主張、意志）、社会性など自主性の構成要素と考えられるものを取りあげて調べることにする。

自律にも、いろいろな面があるが、ここでは自分で計画をたてて実行していくという面を、次の5問で調べてみる。すなわち（C 23）「毎月の小遣いで買えないほしいものを計画的につみたてて買う」（M 25）「むだづかいをしない」の2組と、（C 8）「勉強の時間をきめている」（C 24）「勉強の計画を自分でたてて実行している」（M 24）「勉強や遊びの時間のけじめをつける」の3組である。第14図では左側に（C 23）（M 25）をI—Ⅲを組にし、右側に（C 8）他を示した。



第14図 自律性

小遣いを計画的につかう、むだづかいをしないという消費的生活における計画性、自律性は、明らかにⅢ群がよい。中3では若干低下するが、その関係は変わらない。母親の中3の回答を除いて：他は「有意」な差である。

勉強面での自主性にも、小5ではⅢ群がはっきりと良いが、中3では数値的にはI群が良いものもあり、優劣はきめがたくなる。

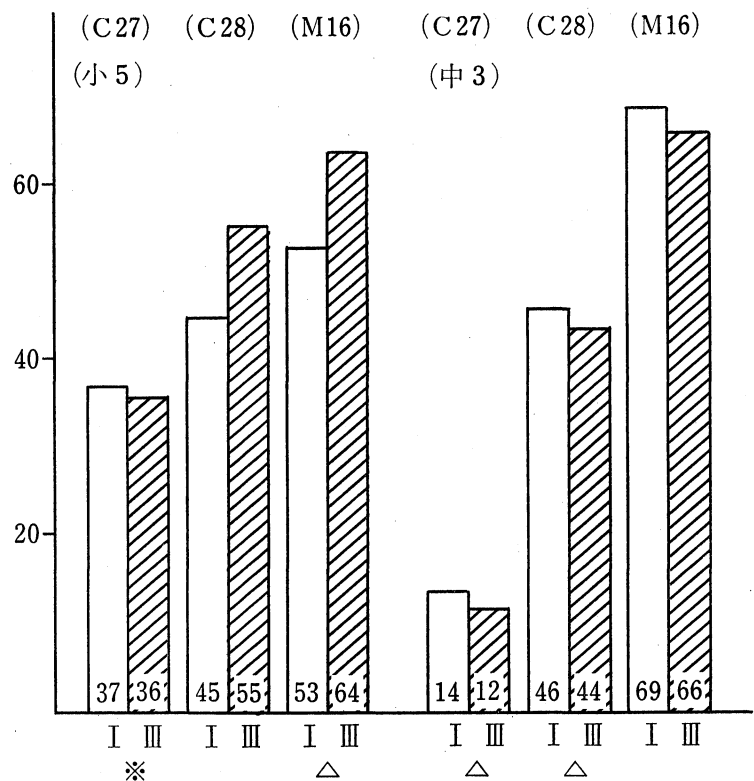
以上の点から生活面の自主性も、「小遣い」などの消費的な面と勉強・時間のけじめという生活面では異なるように思われる。それは小5の時点ではあらわれていないが、中3になるとあらわれ

てくる。I・III群のちがいは小5ではIIIがよいが、中3では単純に云えなくなる。

自律性の「意志」の強さという面をみるために、(C 27)「テレビの見たい番組があると、テレビを見てしまい、予定していた計画を変えたり宿題などがやれなかったことがよくあるか」で「いいえ」と答えたもの、(C 28)「自分がやりたいと思っても、人に迷惑になるようなことはじっとがまんすることができる」(M 16)「乗り物などで騒ぐことがない」の3つを調べよう。

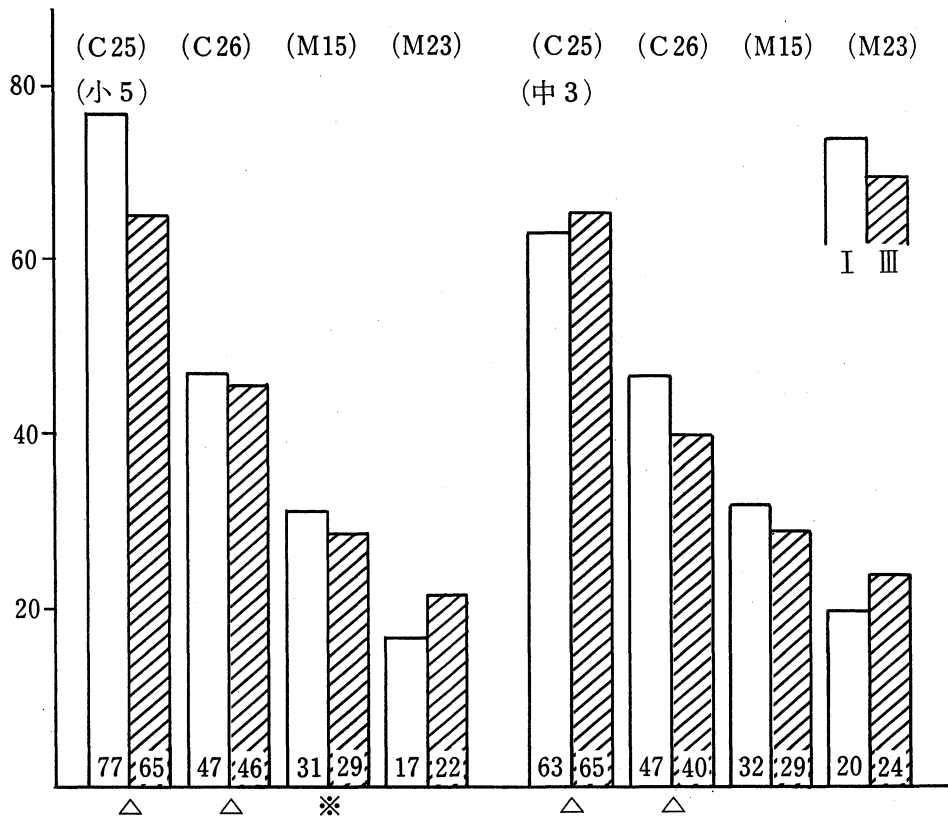
「テレビの誘惑」では、両者にほとんど差がないが、公共性・社会性との関係でのがまんでは、小5では明らかにIII群がよい。しかし中3ではこの関係は逆転してしまう。「テレビ」の誘惑にかてる子は急激に減少している。「他人に迷惑になることはがまんする」も中3ではI群は変わらないのにIII群が減少する。

第16図は、主体性に関係のあるものを並べた。(C 25)「正しいと思うことは主張する」(C 26)「いやなことはいやとはっきり自分の気持ちをいう」(M 15)「人前で自分の考えや意見をはっきりいう」(M 23)「やりかけたことは最後までやりとげる」の4つである。最後の「意志」「努力」の面では、小5、中3ともにIII群が若干良いが、他はI群の方が良いようであるが、「有意」の差ではない。正しいことは主張するは、小5でI群がかなり良いが、中3では両群がほとんど並んでしまう。自分の気持をはっきり云う子どもは50%にみえず、意外に子どもたちは自分の気持が表明できないようである。III群は中3で更に低下している。

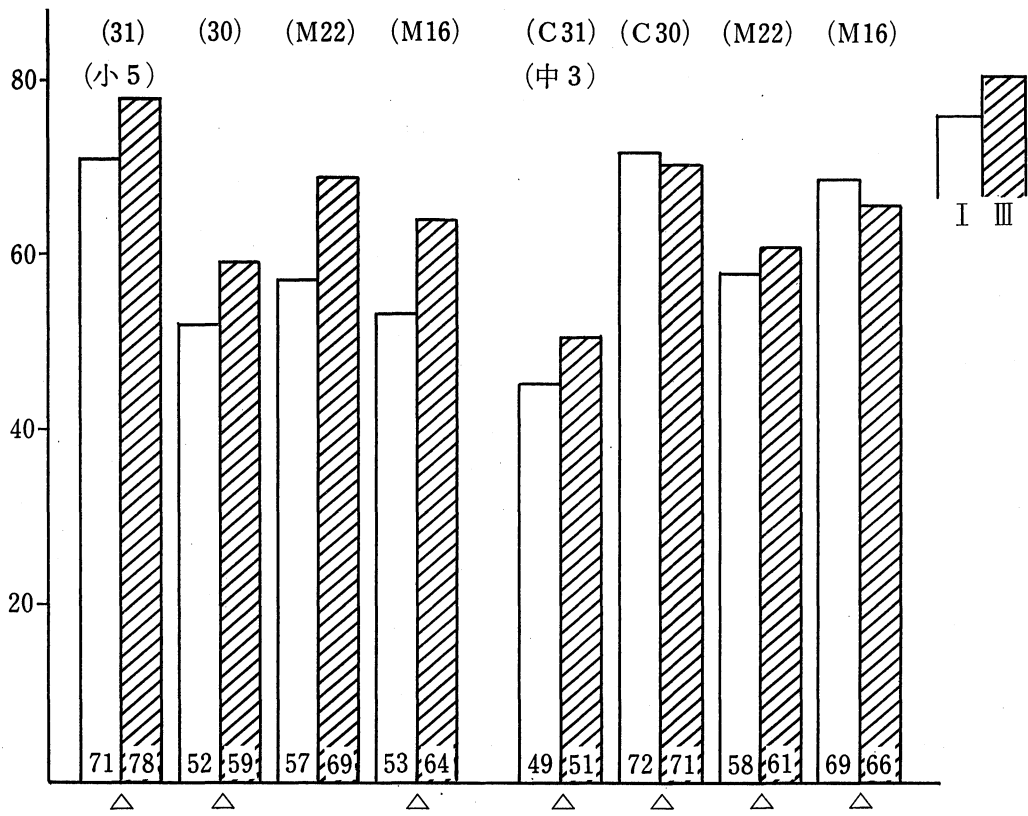


第15図 意志の強さ

最後に社会性に関する面を第17図に示す。ここには(C 31)「学級の係のしごとなどを精一杯がんばる」(C 30)「友だちとの約束は守る」(M 22)「道路・公園などを汚さない」(M 16)「乗り物の中で騒がない」を並べた。これらはIII群の方が良いようである。中3ではほとんどが接近し有意な差はなくなる。ただそれぞれの項目ごとにみると小5から中3への変動はまちまちである。「学級の係」などは、I・III両群とも小5では非常に良いが、中3ではそれぞれ20%以上大幅に低下している。他方「友人との約束」は逆に大きく向上する。子どもがそれぞれの時期に何を大切



第16図 主体性



第17図 社会性

なこと、守るべきことを考えるかが変化しているのである。その変化は基本的傾向としてはI・III両群に共通している。

## VI. ま と め

これまで検討してきたことを個条書的にまとめておこう。

- 1 母親のなかから「母子関係」において「問題的傾向」を強くもつ母親の集団ともたない集団とを分別し、M-I, M-IIIを選び出した。M-I群の子どもをC-I, M-IIIの子どもをC-IIIとした。
- 2 M-Iには、「問題的傾向」を強くもつ子が小5で46%, 中3で28%含まれている。中3では対照性がうすれるので以下のまとめでは中3については省略する。
- 3 母子の接触・認知で、A) 日常的接触はM-IとM-IIIに有意な差はない。B) 相互認知はM-Iが低い(有意)。C-Iも低い(やや有意)。
- 4 母子の心理的關係で、A) 相互の不信感はM-IとC-I間で大きい。M-IとM-IIIでM-Iが非常に大きい(有意)。C-IとC-IIIの比較ではC-Iが大きい(やや有意)。B) 相互信頼は、M-Iが大きい(やや有意)。C-IとC-IIIでは差がない。子どもと母親との関係でいえば、M-IとC-Iの関係がより一致的である。——心理的關係の総体としてはM-I, C-Iには「相互不信」も強いが、反面で相互依存・相互期待的な関係も強い。
- 5 母親の「神経質さ」は、M-I群には、神経質とみられる母親が多い(40%)。しかし、やや神経質という部分も含めると、M-IIIとの差は小さくなる。
- 6 M-Iには子どもにたいして「管理」主義的な母親が多い(36%, 有意)。子どもにおいてもC-Iにそううけとめているものが多い(41%, 有意)
- 7 子どもに「甘い」点でもM-IはM-IIIより多い(有意)。子どもはC-I, C-III間に差がなく、全体として母親を「甘い」と思っている。
- 8 母親のしつけは、M-Iが努力度が高い(有意)。日常生活の規律, 自立, 社会性などについてとくに努力している。
- 9 子どものしつけのうけとめは、C-I群が高い(やや有意)。
- 10 子どもの生活の状況 A) 基礎的生活習慣ではC-I, C-III間に有意な差はない。傾向としてはC-IIIの方がよくみえる。B) 日常生活の規則正しさ——生活時間の状況は、「好ましくない」ものがC-Iに多い(有意とはいえない)。C) 自立的な生活習慣はC-Iが低い(有意ではない)。
- 11 子どもの自主性で A) 自律性はC-I群が低い(有意)。B) 意志の強さは、C-I群が低い(有意)。ただし「テレビの誘惑にかつ」ではC-I, C-III間に差は全くない。C) 主体性は、C-I群がよい(有意ではない)。D) 社会性は、C-I群が低い(「友との約束」のみが有意, 他は有意でない)。

以上に概括したように、M—I群の母親は、しつげに熱心で、子どももそれなりに「うけとめ」てはいるが、子どもの生活自体についてみれば全体的な傾向としてはC—Ⅲ群の子どもの方がよく、すくなくとも、C—I群の子どもに母親のしつげ努力が効果をもたらしているとはいえないことがわかった<sup>5)</sup>。このまとめでは省略したが、M—IとM—Ⅲの差は、中3では縮小していく傾向がみられ、また子どもについてみると、多くの場合に、小5の時点で確立されていたとみられる習慣や人格的特性が中3で崩れ、後退していく。そしてそれは小5の段階で高い水準を示していた部分(C—Ⅲ群)におこることが多い。こうして結果的には、中3ではC—IとC—Ⅲとの差は縮小し、あるいは逆転している。これは小5ではさまざまな差異を示していた集団が、中3ではある共通の状態におちつくということである。前章まで個々の問題について、この小5から中3への変化を、母親の側の変化からもたらされたと推定したり、子ども自体の判断基準・感じ方が変化しているのではないかと推測したりした。恐らく、それは個々の問題によってちがうのであろうし、一見矛盾するようであるがこの母親・子どもの双方に変化がおこっているのであろう。そうしてそれらの相互作用のなかで、総体としては子どもは「おちつくべきところにおちつく」のではないだろうか。子どもは小5の時点では「母子関係」のあり方、具体的には「母親の子どもにたいする態度」に大きく影響されているが、一定の年齢(今の場合では中3)になるとこの母親の影響よりもより強い要因——それが何であるかは、これまでの検討のなかからは導き出せないが——恐らくは発達段階のなかにあるものや中3という時期での子どもの社会的環境(学校生活・子ども世界の価値基準など)によって影響され、それによって母親のタイプによって分別されたC—I、C—Ⅲなどの子ども集団の性質がうち消されていくのではないかと考えられるのである。

このようにみることは、あくまでも母親、子どもを「集団」として扱い、その「集団」間の関係・差異を問題として考える限りのことである。従って、個々の子どもの問題として考える場合には少なくとも小5の時点についていえば、M—IとC—Iの関係よりもM—ⅢとC—Ⅲの関係の方がより「好ましい」関係であることを否定するものではない。

M—Iの母親とその子C—Iにみられる特徴が、どちらに起因しているか——たとえば母親が口うるさいから子どもが逃げるのか、子どもに問題があるから母親が口うるさくなるのか——は、この調査の資料を解釈する場合には大きな問題である。これについては場合によって異なるであろうから一概には云えないが、このデータを全体としてみると、M—I群を特徴づけているのは母親側の「神経質さ」「過敏さ」であるように思われた。

最後に、このM—I、M—Ⅲの集団の社会的諸属性についての一覧表(第3表)を掲げる。M—I～M—Ⅲとそれぞれの属性とをクロスさせ $\chi^2$ 検定をした結果をSIGN. (Pr.)として附記した。

表に示されているように、同じ属性間のクロスであっても小5と中3で構成割合(%)が大きく異なったり、有意水準が大きく異なる場合が多い。上述した子どもの学年の差が、母親にどのようなちがいをもたらすかを考えさせる資料である。たとえば「子どもの位置」による差異は子どもが

小5であるか中3であるかにかかわりなく「有意」な関係にあるが、「年間所得」「子どもの数」などは小5ではI群, III群の構成と関係があるようにみえるが, 中3では意味のないものになってい

第4表 M-I, M-IIIの分布の特徴

			I	III	SIGN. (Pr.)			
子どもの性別	小5	(男)	15	43	0.98>Pr.>0.95			
		(女)	15	44				
	中3	(男)	16	42	0.80>Pr.>0.70			
		(女)	18	42				
地域特性別	小5	商	18	36	0.30>Pr.>0.20			
		旧	15	48				
		新	12	46				
		農	15	42				
	中3	商	17	39	0.70>Pr.>0.50			
		旧	15	47				
		新	18	39				
		農	19	42				
地域・性別 (左男 右女)	小5	商	19	17	33	39	0.50>Pr.>0.30	
		旧	11	19	47	48		
		新	14	9	45	44		
		農	17	12	43	38		
		中3	商	17	17	35	41	0.95>Pr.>0.90
			旧	14	14	46	45	
新			18	18	37	39		
農			16	21	43	39		
年間所得別	小5	250万未満	26	36	0.001>Pr.			
		250~450万	11	52				
		450万以上	10	45				
		中3	250万未満	17	40	0.90>Pr.>0.80		
			250~450万	17	43			
			450万以上	15	46			
母親年齢別	小5	~40	14	42	0.20>Pr.>0.10			
		41~	18	46				
		中3	~40	20		38		
			41~	16		44		
母親学歴別	小5	中	11	40	0.70>Pr.>0.50			
		高	14	47				
		大	11	49				
		中3	中	14	46	0.90>Pr.>0.80		
			高	15	44			
			大	15	39			

			I	III	SIGN. (Pr.)
母親有職別	小5	有 無	15 11	44 46	0.50>Pr.>0.30
	中3	有 無	14 14	41 51	0.05>Pr.>0.02
父親職業別	小5	農 他 労 他 公 他	16 15 13	42 39 48	0.50>Pr.>0.30
	中3	農・商・サービス 労 務・事務 公 務・役員	16 20 17	41 38 45	0.07>Pr.>0.50
子どもの数別	小5	~2 3~	16 13	36 51	0.001>Pr.
	中3	~2 3~	17 17	44 41	0.80>Pr.>0.70
子どもの位置別	小5	長 子 中 間 子 末 子	15 14 13	36 50 51	0.01>Pr.>0.001
	中3	長 子 中 間 子 末 子	16 22 16	39 38 51	0.02>Pr.>0.01

(SIGN. は M・I, II, IIIと各特性とクロスさせ  $\chi^2$  検定した値)

る。また母親の子どもに対する態度が、その母が「有職」であるか否かによって異なるのではないかという推定があるが、この調査では、中3については「やや有意」であるが小5では関係なしとみてよいようである。

(1981. 10. 15)

#### 注

- 1) 鹿児島子ども研究センター『鹿児島の子どもと親の生活と意識 調査報告書(第一次)』1981年5月(鹿児島大学教育学部教育学第四研究室気付 鹿児島子ども研究センター)
- 2) 品川不二郎・品川孝子「田研式 親子関係診断テスト」田中教育研究所 日本文化科学社
- 3) 本報告で引用している質問文は、実際に使用した文章を一部省略したり文体を変えたりしている。しかし内容は変りない。
- 4) 前掲、「報告書」p. 50 報告書では4群にわけて説明してあるが、本稿では簡略化して3群とした。
- 5) 母親の「しつけ努力」と子どもにおける「しつけの達成」との関係を見るため、本調査でのしつけに関する12問について、「しつけをしている母親」の%と「しつけを達成している子ども」の%を集計し、その各群ごとの「達成/努力」を求めると次のよう

になる。

すなわち、平均としてI群の母親のしつけ努力はその子どもには小5で88%の効果をもたらしているが、III群の母親では、小5で128%の効

	I	III	III/I
小5	0.88	1.28	1.45
中3	0.97	1.36	1.40



果をもたらしている。128%ということは努力していると回答している母親よりも達成している子どもが28%多いということである。小5ではⅢ群の母子関係はⅠ群よりも1.45倍の「効果」をもっていることになる。

(後記) この調査研究は、「鹿児島子ども研究センター」の共同研究として行なわれ、また鹿児島大学南科研総合研究助成費の援助をうけた。調査には関係学校の御協力があり、また調査の集計・処理には鹿児島大学電子計算機室に大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。